

子どもの〈つくる〉活動のプロセスの検討 —素材と関わりながらアイデアを形にする—

Examination on the Process of Children's Making Activities
—How Children Transform Their Ideas into Reality Interacting with Various Materials—

佐藤 牧子
Makiko SATO

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 博士後期課程

キーワード：子ども，ティンカリング，つくる活動，プロセス，アイデア
Key words：Child, Tinkering, Making Activities, Process, Idea

1. 研究目的

本研究の目的は、〈つくる〉活動において、子どもが多様な素材とどのように関わり、子どもの内なるイメージやアイデアが具現化（形）していくのかについて、そのプロセスを明らかにすることである。先行研究においては、幼児の造形表現に関わるプロセスや児童における教科の枠組みの中での活動のプロセスを追っている研究が多く、子どもが〈つくる〉活動の中で、多様な素材と関わりながらアイデアを具現化（形）していくプロセスを追った研究はあまりない点が、本研究の学術的独自性と言える。

また、発達段階を連続的に捉えることができる点と、通常の幼児教育や小学校教育という枠組みを超えたところで子どもの〈つくる〉活動を捉えることによって、子どもにとっての〈つくる〉ことの本質的な意味を明らかにするために、本研究においては対象を幼児と児童にしている。

2. 2023 年度の研究報告

1) 2022 年度の研究を踏まえた再検討

リサーチクエスションの精緻化

子どもが〈つくる〉活動において、アイデアを形にする方法には、「素材と実験的に関わりながらアイデアを形にしていくアプローチ」と「イメージしたものに合わせて素材を選択して、アイデアを形にしていくアプローチ」があることはすでに確認しているが、さらに、子どもは〈つくる〉過程において、周囲の大人と多様な関わりをもっていることも新たに確認することがで

きた。

- ・自分の作品を見せる
- ・相談する
- ・アドバイスを求める
- ・甘える
- ・大人の〈つくる〉活動に興味をもち観察する
- ・大人からの相談にアドバイスを求める
- ・つくっている内容とは関係のない話題をしながら個々に自分の作りたいものをつくる

これらの結果から、子どもは周囲の大人とどのように関わりながら〈つくる〉活動を行っているのかをリサーチクエスションに追加することにした。よって、フィールドノートにも大人との関わり方についての詳細を記すことにした。

2) 2023 年度フィールドワークの概要

フィールド A

【場所】東京都 A 区児童館の工作室
【ワークショップ名称】工作アトリエで遊ぼう
【実施日】2023 年 4 月 15 日（土）、5 月 20 日（土）
／6 月 17 日（土）／8 月 15 日（火）／10 月 7 日（土）
／11 月 4 日（土）／12 月 23 日（土）／2024 年 1 月 27 日（土）
／2 月 3 日（土）／3 月 9 日（土）
／計 10 回
【活動時間】2 時間
【協力者】

- ・小学 1 年生～6 年生
- ・予約なしの当日先着順
- ・スペースの関係上 15 人前後／毎回
*8 月 12 日（30 人）

【倫理的配慮】

当日参加の子どもの内、〈つくる〉活動に興味をもって、継続的に参加が見込めそうな子については、児童館の職員を通して保護者に研究協力の依頼を行い、同意書を得ている。

【結果】

本フィールドでの活動が2年目であったことから、認知度も上がり、継続的に参加する子どもが増えてきた。その結果、同じ子どもを2年間の経年で見ることができたため、同じ素材を使い続けて素材の特徴を掴み造形表現に活かしていく様子なども記録することができた。

フィールド B

【場所】 大妻女子大学の造形表現室

【ワークショップ名称】 千代田クリエイティブ・アートラボ

【実施日】 2023年5月13日(土)* / 7月15日(土)*, 25日(火) / 8月5日(土)*, 12日(日)*, 25日(金)* / 2024年1月23日(火), 30日(火) / 2月12日(月)* / 3月3日(土)*, 16日(土) / 計11回

【活動時間】 2時間, *は5時間

【協力者】 大妻女子大学の近隣の子どもたちで、本ワークショップに参加歴のある約10名に対して前月中に参加募集メール(保護者宛)を送り、Googleフォームで申し込み申請の管理を行う。

【倫理的配慮】

継続的に参加が見込めそうな子については、保護者を通して研究協力の依頼を行い、同意書を得ている。

【結果】

フィールドAと同様に2年目であることから、協力者である子どもたちが、場や素材、道具を把握しており、個々に〈つくる〉ことを深めていく様子を記録することができた。Y児(小学6年生)は、さまざまな素材と関わってきたが、7月に行った色水遊び以来、自分の色を作り、色に名前をつけることに没頭するようになった。名称は自分のイメージを具現化するために、カタカナ、ひらがな、漢字などのこだわりをもってつけている。現時点で100色を作り終えている(図1~図4)。2024年度から中学生になるY児だが、今後も色水作りを継続していくことが予定されているため、次年度も記録を取り溜めていきたい。



図1 色を調合して自分の色を作り命名する



図2 カンカン照りの海いろ



図3 ホタルのおしりいろ



図4 後悔の電磁波いろ

3) 学会等における発表および論文等の投稿

① 6月17日(土) 作品発表

「カタマリと向き合う」

日本ホリスティック教育/ケア学会 第6回研究大会

本研究との関連

子どもの造形素材として使用しているストロー工場から出るリサイクル素材を、子どもたちとの活動を含めて作品として発表した。本研究においては、子どものものづくりにおいて多様な素材との関わることを大切にしているため、素材そのものに丁寧に向き合うこと、素材を知ることが重要である。

② 10月8日(日) 口頭発表

「保育者養成校における科目「造形表現」の検討—保育学生の苦手意識に着目して—」

日本美術教育連合 第57回研究大会 口頭発表

本研究との関連

保育学生の造形表現に関する苦手意識に注目して行った調査結果を発表した。苦手意識をもつ学生の中には、「他社からの評価が気になってしまい造形表現活動を楽しむことができない」、「これまでの学校の授業では、素材と十分に関わる時間が確保されていないため、素材のことがわからないまま限られた時間の中で作品を完成させなければ畏敬ため、自分のイメージを実現することができない経験ばかりを積み重ねた結果、造形表現に苦手意識をもつようになってしまった」といった話が出た。一方で、苦手意識をもたない学生は、幼少期に自分の興味関心に合わせて身近な大人(親)が環境を整えてくれていたり、もの作りの好きな大人(親)が周囲に存在していたことが明らかになった。学生を対象とした調査ではあるが、子どもの造形表現についての研究においても、素材との関わり、大人との関わりといった点で示唆的であった。

③ 11月18日(土)～11月19日(日) ポスター発表「アイデアを形にする」

図工美術の授業展 vol.5, さいたま市教育研究会 図工・美術部

本研究との関連

子どもたちが素材と関わりながらアイデアを形にしていくプロセスにおいて、子どもたちは実験的な試みを行ったり、自分なりの技術を深めていたりしていること、またアイデアを形

にしていくためには、それぞれのテーマや子どもによって必要な時間が全く異なることを経年的に見た子どもたちの活動を示した。

④ 11月12日(日) 作品発表「白い塊」

美術教育研究 第29回大会

本研究との関連

人と人、子どもと大人、人と社会、学校と地域、教育と企業など、子どもたちに造形素材の一部として提供しているストローのリサイクル素材を通して、さまざまな出会いがあり、つながりを生むことそのものをアート作品として発表した。子どもたちにとって造形素材と場所や人はつながりをもって記憶されていることがわかっているため、素材のもつ力を認識する作品となった。

⑤ 3月15日(金) 実践報告

「素材をマクロに ミクロにみる」

大学造形美術教育研究 Vol.22

本研究との関連

造形活動において、素材と関わり素材への理解を深めることが、想像的・創造的活動には不可欠であることは言うまでもない。子どもたち(幼児・児童)の造形活動においては、素材に十分に関わる時間の確保が課題であると感じる一方で、保育学生においては、素材への関わり方、関わる視点の弱さに課題を感じている。本稿では、素材にミクロな視点とマクロな視点でアプローチした結果を保育者養成校の学生の反応を通して、素材へのアプローチの方法とその優位性として言及している。学生の実践は、子どもにおいても実践しているため、本研究の比較材料として位置づけている。

⑥ 3月15日(金) 産学連携 実践報告

「端材×造形 - 木材の魅力, 端材の魅力を探求する」

大学造形美術教育研究 Vol.22

本研究との関連

創業200周年を迎える材木屋である大和屋(株)と産学連携の一環として「建築端材」を扱ったワークショップを行った報告。年齢や立場、所属などの枠組を超えて、ともに手を動かしながら考えることを通して「人と人の関係性」や「活動」を新たに創造することを目指して、企業・幼児・児童・大学生・幼稚園教諭・小学校教諭・大学の教員というメンバー構成で、木材の実験を行ったり、実

際に端材で作品を作ったり、端材を造形素材として扱うことについてディスカッションを行った記録である。本研究においては、子どもの〈つくる活動〉において、異年齢の子ども同士の関わりや、大人との関わりについておさえることも重視している。その点が、本研究との関連として位置付くものである。

3. まとめと今後の課題

2023年度は、フィールドワークを行ったり、本研究で子どもたちが使用している素材を使って自分自身の作品を作ったり、保育者養成校における造形活動での学生の声を聞いたりして、子どもの〈つくる〉活動だけでなく、少し範囲を広げて研究活動を行なった。その結果、〈つくる〉という行為を多角的、重層的にみる視点を得ることができたと考えている。しかし、博士論文の執筆が進められていないことは大きな課題である。2024

年度は、3年間のデータを整理して、論文の執筆を進めていきたい。

4. この助成による発表論文等

- 1) 日本ホリスティック教育／ケア学会
第6回研究大会
「カタマリと向き合う」(作品発表)
- 2) 図工美術の授業展 vol.5,
さいたま市教育研究会図工・美術部
「アイデアを形にする」(ポスター発表)
- 3) 東京藝術大学 美術教育研究会
「白い塊」(作品発表)

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(DA2303)「子どもの〈つくる〉活動のプロセスの検討-素材と関わりながらアイデアを形にする-」を受けたものです。